
黄昏の魔導師 ～ 最強の姫御子 ～

Twilight

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黄昏の魔導師〜最強の姫御子〜

【Nコード】

N2994M

【作者名】

Twilight

【あらすじ】

あらすじ

気が付けば数多の世界は混沌の渦となる…。

戦いに明け暮れる世界

犯罪が多発する世界

そんな世界を管理する時空管理局

物語の中心となる色々な実験を繰り返された独りの少女。
やがて彼女達自信が信じるもの以外全てに向けて宣戦布告を開始する。

少女の力は未知数のものでやがて「時空管理局」からは逮捕の対象となる。

この話しは独りの少女が分かり合える仲間と一緒に世界に向けて戦いをする話です。

また、原作ブレイクも行いますので苦手な方は見ずにいた方がいいでしょう。

プロローグ（前書き）

この世界はリリなの世界に元々居たオリ主が織り成す話しと
思ってくれるとありがたいな♪

これから長く連載して行こうと思うけど、更新は不定期になりそう
だからその辺は理解をお願いね？

1つご理解を…

リリなの世界といっても第97世界と管理局本局とミッドチルダだ
けじゃなく、この話しでは全ての管理内外世界も含めてリリなの世
界になります。

後、色々チート？最強計画もあるのでその辺は自信で納得の上で閲
覧して下さい。

長々と失礼しました。
それでは本編へどうぞ♪

プロローグ

管理外世界第23世界にて

管理外世界第23世界は緑が豊かでたくさんの人々が仲良く暮らしている世界である

犯罪なども確かにあるが余程の事が無ければ犯罪とは無縁に近い世界である

??? side

空が悲しげなオレンジ色に包まれる時、とある少女が空中に停滞しながら流れる雲に向かって寂しさを含むような独り言を呟いていた
……

「……私のこの内なる力は……いったい何のために使えばいいのかな……」

「……いつまでこんな事を続ければいいのかな……」

「アナタはどう思う……。……アルテミス?。」

周りには少女しかいないはずの空中に機械的な声が響きわたる。

「……マスター……」

「それでもきつと……きつといつかは……分かり合える人もいるよね……」

「……はい……マスター……」

「そう……だよな……。……さあ……ソロソロ行こうか……アルテミス……」

「私の事を、分かってくれる人を探しに!!」

そんな言葉を口にして決意を秘めた目をした少女は、鮮やかな黄昏色の魔力陣を出してどこかに転移していった

彼女が転移した後に残った物は、地上に作られた数々のクレーターと……たくさんの人々の亡骸があるだけだった……

??? side out

次回へ

プロローグ（後書き）

如何でしたでしょうか？

今回はオリ主の設定などを投稿しようかと思います。

本編はその次になります。

では、次回まで。

またねです♪

オリ主設定（前書き）

はい♪と言っわけでオリ主設定を投稿です。

なにこの微妙なチートとか思っかもしれませんが、後ほど完全なチートとなりますのでご容赦を。

では、オリ主設定へどうぞ♪

オリ主設定

名前 十六夜 桜

(いざよい さくら)

年齢 7歳

魔力値 A A } E X

体力 S S S

知力 E X

反応 S S S

回避 S S S

陸戦 E X

空戦 E X

スキル

現段階では初級〜中級の技、魔法のみ。

(DQ、FFで云々とサンダラとかメラミくらい)

レアスキル

リンカーコアリンク

属性付加&重複

???

???

???

???

度重なる契約のせいで7歳の少女としては持てない力を多数持つてしまった少女。

契約で得た力が余りにも強すぎて自ら封印とリミッターを掛けている

また封印は解放すると特定の場所でしか施せない

そんな彼女が最終的に目指すものとはいったい何なのかは後々のお話で…。

デバイス アルテミス

インテリジェントデバイス

待機時は指輪として機能し、セットアップした時、基本は二刀一対の剣かグローブとなる。

ただし用途によって形状変化ができる。

桜が現状で使えるデバイスはアルテミスのみ。

他のデバイスを使うと桜の情報が多すぎてオーバーフローを起こし機能が止まる。

召喚について

初めの内は召喚を使いませんが、方法としては召喚魔石を割ると云うタイムラグ無しの方法を取ります。

割ってしまった魔石に関してはレアスキルを使い戻します。

（後々の話で納得していただければ嬉しいです）

以上が今のところの設定です。

レアスキルの???は後ほど公開するので今しばらくお待ちを。

次回へ

オリ主設定（後書き）

どうでしたでしょうか？？

今はこんな感じですが無印、A・S Strikersまでは投稿して行きます。

次は本編を進めて行きますので良ければ感想などを頂ければと思います♪

それでは、次回にお会いしましょう♪

第1話（前書き）

ちょっとグダグダ感があるかもです。

では、本編へどうぞ♪

第1話

なのは side

AM 6:00

桜台公園高台

地面がだんだんと黄昏に染まり始めた頃、ひとりの女の子が光輝く地面を見て立ち止まっていた。

女の子は地面に輝く黄昏の光と、空にキラキラ瞬いている太陽を見て困惑していた。

「……えっ？……えつとえつと……今は朝だよな？……でも地面は夕焼けの
色？……ええええええええ！！」

（いったい…どういふことなの？こんなこと初めてだよー！！）

一際大きく光が増し初め、目を開けていられず腕を使い、目を閉じて光が収まるのを待っていた。

やがて黄昏が終わり変わらぬ朝に戻ったとき、なのはの目に映った物は……

「……ん？？……っ！！！」

見知らぬ女の子が1人倒れていたのだった

なのは side out

??? side

「……っ！……ここは……??」

私が目を覚ました時、私は見覚えのない部屋に居た

「マスター、起きて平気ですか？」

「アルテミス…アナタも無事だったのね。でもここは知らない世界
なんだから、念話に切り替えましょう」

「後、名前で呼んでくれないかしら。あいつらはいないし平気でし
よう？」

「それもそうですね！さくら。」

「所で、ここは…??」

そんなとき、部屋に1人の女の子が入ってきた。

「よかった！起きたんだね！！無事でよかったの！今、お父さん達
連れてくるから待っててね。」

パタン…パタパタパタ…おとうさ………

「元気な子ね…ふふ」

「そうですね。あんな子は絶対に守らないと行けませんね。さくら」

（そうね…あいつらは無邪気な子供でさえ…あんな事を…）

「そう言えばあのデータは…」

「ちゃんと保管済みです。安心なさい！さくら。」

そんなやり取りをしてるとまた部屋の扉が開いた

そこには先ほどの女の子と女性と男性が立っていた

「初めまして。僕の名前は高町士郎。君が倒れていたのをここへ運んできた者だよ」

「初めまして。私は高町桃子よ。士郎さんの妻でなのは母親よ。」

「は…初めまして。高町なのは…です…。」

「とりあえず、君の話を聞きたいんだが…平気かい…??」

「…アルテミス…どうかしら…周りに反応は…??」

「いえ、まったくありません…それにココも管理外世界です。…話すのですか??」

「ここまで看病されて黙ってるのもね。とにかく話すわ。」

「分かりました。私の名前は、十六夜 桜です」

こうして、運命の輪が回るのだった……

第1話（後書き）

如何でしたでしょうか？

次回は高町家と仲良くなるための話しにします。

では、また次回で♪

第2話（前書き）

なんとなくですが、桜の辛い心境と暖かな家族を描けていれば幸いです。

では、スタートです。

第2話

「それじゃあ、桜ちゃん。幾つか質問をさせてもらおうよ?」

「……はい。しかし、答えられないこともあるのでその辺は……」

「うん。その辺りは僕らも分かっているつもりだよ。安心して!」

「……すみません……。ありがとうございます……」

「じゃあ、まずは……桜ちゃんは何故あの場所に倒れていたんだい?ましてや、なのはの話しでは光が消えた後に倒れていたって聞いたけど……」

「……まずは私の方からも幾つか説明をしないと話しが見えてこないですね……」

「……皆さんはこの世界以外に、人は住んでいると思いますか……?」

「それは……どういうことだい?」

「……言葉の意味通りです……。私は皆さんの住んでいる世界とは別の世界からこの地に来ました……」

「私が居た世界では科学も発展していますが、更に魔法も発展していました。」

「魔法?」

「あら!それはとても素敵ね!」

「ま…ほっ?？」

そこからの話しは分かりやすく説明を行っていった

自分の世界の事

魔法を使い生活などに役立てていること

犯罪もあるが科学と魔法で解決してること

条件を満たせば世界を越えられること

…他にもたくさん話を話したが…ただ1つの出来事だけ桜は曖昧に話した…

「はあ…桜ちゃんはそういった場所から来たんだね。」

「はい…ただ私1人では出来ることも限られてきます。なのでアルテミスにも手伝ってもらいました。」

「アルテミス?」

「…起きて、アルテミス。アナタも自己紹介しなさい?」

桜は右手を高町家に向けた瞬間、どこからか機械的な声が響いてきた

「イエス！マスター！…初めまして、皆さん。アルテミスといいます。桜共々よろしく願います」

「…っ！！どこから声が聞こえてくるんだい！」

士郎は驚いている…と、隣に居た桃子が話し始めた

「あら、もしかして指輪からかしら？桜ちゃん、この指輪は……？」

「この子はデバイスと言われるものです。この子が居たから私はこの世界に来了ました…」

「なるほど、桜ちゃんの世界ではデバイス…だったかしら？それが魔法のサポートを行っているのね」

「そ、そうです！…理解が早くてビックリしました…！！」

そんなやり取りをしていた時、静かにしていた女の子が話しかけてきた

「えっと…桜ちゃん…だったよね？これから…どう…するの？？」

「…君は…私を見付けてくれた女の子だね？助けてくれてありがとう…」

「うっん…気にしないでいいの、それよりもこの後はどうするの？」

そう……この後の事なんかまったく考えていなかった桜だった……だから……

「そう……ね……。とりあえず皆さんに御礼をした後はどこか適当に」「桜ちゃん?」……はい?」

……いきなり会話を遮ったのは桃子さんだった……

その顔はまるで、笑顔を振りまくようでありながら背後にはなんとも云えないオーラを纏っていた……

「桜ちゃん! 貴女さえよければ家に住まない?? なのはとも友達になつて欲しいし……? ……どうかしら??」

「士郎さんもいいわよね??」

「もちろん賛成だ。どちらにせよ、この世界では君に身寄りが無いし、家には部屋も余っている。桃子が言わなければ私が進めていたよ?!!」

「私も賛成なの!! 桜ちゃん、一緒に住もうよ!!」

目をキラキラ輝かせながらなのは期待している

「しかし……皆さんからしたら私は不審者とも思われるわけですし……そんな私がご迷惑を掛けるわけには……」

「桜ちゃん、気にしないでいいわよ！周りが何を言っても私達は家族なんですから」

「……家族……。」

「そつだぞ。君は迷惑とか考えなくていいんだ。私も桃子もなのも……今はこの場に居ないが息子と娘も理解してくれるよ！！」

「桜ちゃん……お願いなの。一緒に住もう??」

「……アルテミス、私は……どうしたら……」

「桜、貴女には家族や友人が必要です。出来事の一部を曖昧に説明しましたが、それを承知で誘ってくれています。」

「桜……いつか全てを話せる時がくるまで、皆さんを信じてみましよう。きっと力になってくれますよ！！」

アルテミスは普段からは考えもつかない穏やかな声で後押しをしてくれた

「……ホントに私は此处に居ても……いいんでしょうか……??」

「「「もちろん（よ）（だよ）」「」」

こんなにも暖かな家族のお陰で、桜は静かに俯きながら一筋の涙を流し感謝の言葉として顔上げて笑顔で言った

「これからお世話になります!!」

「マスター 共々よろしくお願いします♪♪」

第2話（後書き）

上手く表現できたでしょうか？

桜の辛い出来事は後々に高町家全員を含めて話す機会があるのでその時までお待ち下さい。

今回は一旦ここまで。

次回をお待ち下さい。

第3話（前書き）

今回は恭也と美由紀が登場です。

試合（死合い？）をするためのフラグでもあります。

では、飽きられないように頑張って行きたいと思います。

第3話

なのはside

（お父さんとお母さんが難しい話を桜ちゃんにしていたけど、最後の部分はなのにも分かったの。）

（後、魔法とか言ってたけど……桜ちゃんが魔法使いなの??）

（……後で見せてくれるかな……??）

（てゆうか、桜ちゃんいいなあ……ホントに使えるなら、なのも魔法って使ってみたいの!!）

（後…空とか飛べるのかな……?）

（後で桜ちゃんにどんな事が出来るのか聞いてみるの!!）

なのはsideout

なのはが色々考えていると桜からいきなり声を掛けられた

「なのはちゃん?」

「……っ!はいつ!!」

「そんなにビックリしないで？なのはちゃん、何か考えていたみたいだけど……良かったら教えてくれる？」

色々顔が変化していたなのはにそう言った

「な…なんで分かったの〰〰〰」

「なのは。顔に出てたわよ〰〰」

「お母さん！！ホント？？」

「ええ〰〰」

（にゃ〰〰〰〰恥ずかしいの〰〰〰〰）

「そ…それで……なのはちゃんは私に何か聞きたいことがあるんじゃないかな？」

「うつ……えつと……〰〰〰」

「私に答えられるなら何でも聞いていいよ。」

「……その……桜ちゃんは……ホントに空とか飛べるの……？？」

「なのはわ…魔法使いつてあんまり詳しくなくて…空を飛べる位しか分からないの……」

「なるほど……私が魔法を使えるかどうか考えていたのね?」

「……うん……。」

「では…なのはちゃんに証拠を見せましょう。」

「えっ?」

桜はそういつと指輪に向かって声を掛けた

「アルテミス?この世界に彼らの反応は?」

「無いです…が、油断は禁物です。今は10秒くらいにしてください。」

「

「ありがとう。分かったわ。」

「じゃあ、なのはちゃん…10秒位しか見せられないけど……」

「それでもいいの!桜ちゃん見せて見せて」

「分かったわ。アルテミス!」

「Twilight Wing」

なのはside

(こんなに早く桜ちゃんが魔法を見せてくれるなんて嬉しいの)

（でも表情を色々で見られたのは恥ずかしかったの／＼／＼／＼）

（でもやっぱり桜ちゃんは魔法を使えるんだ…見せてくれるのは何かな？）

なのはsideout

機械的な声が部屋に響き渡った刹那、そこには空中に浮かんで微笑んでいる桜がいた

「どうかな？なのはちゃん」

「すごい…すごいよ桜ちゃん！」

「でもこの力の事は絶対に話したらダメだよ？」

「と…どうして??」

「私はたくさん力を持っているのせいで怖い人に追いかけられるの…」

「その人に見つかったら私に関わった人はみんな殺されてしまうわ……」

「そ…そんな…」

「だから絶対に話さないで!!」

桜がここまで強気で断言したことに驚かされた高町家は、有無を言わずに頷いた

「ところで桜ちゃん、暗い話はここまでにして、後2人ほど紹介したいんだが……」

「あつ、はい。」

「桜ちゃん♪」

「私達はもう家族なんですからここからは畏まった言葉じゃなくて普通に喋りましょう?」

「ですが…「桜ちゃん?」……分かったわ。」

「士郎さん?後2人というのは扉の向こうに居る人たちなんでしょう?」

「…っ!気付いていたのかい?」

「ええ♪気配が増えていましたから♪」

「とりあえず恭也、美由紀入ってこい。」

士郎がそう言うのと扉が開き男の人と女の人が入ってきた

「気付かっていたか…まだまだ修行が足りんな……とりあえず高町恭也だ」

「あはは♪スパッと見抜かれて恭ちゃんが凹んでる(笑)あつ、私

は高町美由紀だよ」

「父さん？この娘は……？？」

「今日から家に住むことになった十六夜桜ちゃんだ。」

「ちなみに今7歳だが…なんとこの歳で実戦経験もあるらしいぞ？」

「「実戦！？」」

「まあ、その辺は置いて…とにかく訳アリの女の子だからな。みんなで守っていくことになるぞ」

「……そうか…分かったよ。父さん」

「私は桜ちゃんと仲良くできれば何でも構わないよ！お父さん」

「私は平気よ。土郎さん」

「なのはも仲良くするの♪よろしくなの、桜ちゃん♪」

「改めて……これからお世話になります。」

「よろしくね♪なのはちゃん？」

「うん」

なのはが喜んでいると、いきなり桜は目付きを変えて後方へ跳び下

がった

睨みつけた先は高町親子…土郎と恭也の2人だった…「…驚いたな…まさかこんなに早く微弱な殺気を察知するとは…」

「俺もだよ。父さん」

「ビックリさせないでくださいよ土郎さんと恭也さん…」

「あつ…ああ…すまなかったね…」

「…すまん…」

「何かと思いましたよ…もう…」

「…父さん…（ヒソヒソ）」

「…いや、しかしだな…」

「頼む！父さん！！」

「ふう…仕方ない、聞いてみようか？」

「ああ。」

「桜ちゃん、1つ頼みがあるんだが…」

「あつ、何ですか？…っと…ああ…、まあ何となく分かりました…。」

「恭也さんと試合をすればいいんですね…??」

「……………何故分かったんだい？」

「…女の子の秘密にします」(笑)「

「恭也さん、やるなら本気で掛からないと足元を救われるかもしれ
ませんよ?」

こうして桜は恭也との試合をすることになったが、高町家と桜はま
だ気が付いていなかった

この試合で1人の女の子が魔法に目覚めてしまうことを

第3話（後書き）

どうでしたか？

上手く表現できたでしょうか？

訂正や誤字脱字があればガンガン伝えて下さい。その都度修正を加えたいと思うので。

では、次回は恭也との試合編を描きたいと思います。

でわ、今回はこの辺で♪

第4話（前書き）

物語始まつての初の戦闘描写です。あまり自信は無いですが頑張ってみました。

今回は本編の中に作者からの注意書きがあります。

本来は好ましくないのですが今回は戦闘描写が初なので入れました。

長々とすいません。
では、本編をどうぞ。

第4話

成り行きで恭也が振ってきた模擬戦

士郎は息子に呆れた様子で、自宅の敷地内にある道場へ桜を案内し始めた

だが、やはり士郎も実戦経験のある桜に興味を持ってしまうのは仕方がない事

いざ道場へ移動を始めた時、なのはから声を掛けられた

「桜ちゃん……お兄ちゃんって結構強いんだよ……大丈夫なの?？」

「なのはちゃん、私は平気だよ。心配してくれてありがとうね!」

と…笑顔で言葉を返す桜になのはわ…

(にゃ／／桜ちゃんの笑顔が可愛いの／／／)

「う…うん…。でも無理しないでね／／／」

と、顔を赤らめながら桜に返事をした

「でも桜ちゃんに実戦経験があるなんて驚いたよ」。

「私も多少はあるけど、どのくらい戦ってきたのか聞いても良いかな?？」

などと、突然美由紀が桜に話し掛けてきた

「美由紀さん……すいませんが……その辺はあまり聞かないで下さい……。」

「……私は実戦で戦いたくて戦闘をしていたわけではないんです……。」

「ただ……いつも一対多数の戦闘だった……だけと言っておきます……。」

そう呟くと、桜を顔を俯けて悲しげな表情を浮かべていた……

「美由紀!!」

「……ごめんね……桜ちゃん……」

「いえ……大丈夫です……。」

美由紀にそう答えたが桜の表情はあまり変わらなかった

美由紀 side

私はこんなに小さな女の子が実戦の経験があることに驚いて、何の気なしに質問を試してみた

「でも桜ちゃんに実戦経験があるなんて驚いたよ。」

「私も多少はあるけど、どのくらい戦ってきたのか聞いても良いかな??」

と…前を歩く桜ちゃんに聞いてみた

が

すぐに聞いたことを後悔してしまった……

「美由紀さん……すいませんが……その辺はあまり聞かないで下さい……。」

「……私は実戦で戦いたくて戦闘をしていたわけではないんです……。」

「ただ……いつも一対多数の戦闘だった……だけと言っておきます……。」

という答えが返ってきて恭ちゃんに怒鳴られ直ぐさまに謝った

「……ごめんね……桜ちゃん……。」

前を歩く桜ちゃんは俯いた為に表情は分からなかったけど…

きつと悲しげな表情をしていると思ったら、私は後悔してしまった

……

（そう……だよ……。……こんなに小さな女の子が戦いたくて戦闘をしたはずがないよね……）

（ごめんね…桜ちゃん…）

美由紀 side out

美由紀との会話をしていると目的の場所…道場にたどり着いた

そして桜は恭也に向かって煽るような言葉を掛けた

「恭也さん、私は初めのうちは手を出しません。」

「開始5分間は回避に専念します…が、その間に私を捉える事が出来たら恭也さんの勝利でいいですよ？ニコッ」

と恭也に伝えた

その言葉を聞いた恭也は桜の只ならぬ雰囲気を見て気を引き締めた

……

「……その余裕は傲慢でも自信でも無い……のだろうな……」

「ならば初めから全力で往かせてもらおう!!」

そついいながら恭也は道場に架けられていた木刀を取り出し、桜に手渡した

しかし桜のとつた行動を見た士郎と恭也、美由紀は驚いた

「木刀が一刀では私は戦えません……もう一刀貸して頂けますか？
」

「桜ちゃん……君は二刀流なのかい……??」

士郎がそう聞くと

「はい。基本的にはですが。」

桜が答える

「そうか…君も二刀流なのか……これは楽しめそうだな……」

恭也は楽しそうに桜に向けて声を掛ければ

「私「も」と言うことは、恭也さんも二刀流なんですね?。」

桜が答える

「ああ…その通りだ!。」

桜と恭也を中心に、道場の端には士郎と桃子、美由紀となのはが観客として二人を見ていた

「さて…そろそろ始めましょうか? 恭也さん?。」

「そうだな…君の力を見せてくれよ?。」

「恭也さん次第ですね。ふふ」

士郎が二人に向かって声を掛ける

「それでは二人とも構えて」

互いに構えを取り初め、恭也は何時もの如く名乗りを始めた

「永全不動八門一派・御神真刀流小太刀二刀術……師範代、高町恭也。…推して参る!!」

それを受けた桜は

「霞流・夢幻二刀術……十六夜桜。参ります!!」

名乗りを返し……

「それでは……初め」

士郎の声が道場に響き渡った

恭也 side

聞いたことの無い流派に恭也は興味を持ち内心喜んでいた

（霞流・夢幻二刀術……どんな太刀筋なのだろうか……）

（しかし、先程の余裕は無視できんな。）

（だが、これほどの余裕を取れる強敵だからな……初めから全力だ！！）

「ではいくぞ！」「射抜き」！！」

恭也 side out

模擬戦が開始してすぐさま恭也の攻撃が始まった

「うわっ！お父さん！！恭ちゃん本気だよ！！」「射抜き」から入っていた！」

「恭也のやつ……全力になるのは良いことだが……、相手はまだ小さな女の子なんだぞ……。」

「その辺り分かって……カキン……なっ！！」

桜 side

士郎さんが開始の合図を出すと同時に恭也さんが攻撃を仕掛けてきた

「ではいくぞ！」「射抜き」！！」

「射抜き」と呼ばれる技を見た桜はすぐさま反応をした

（コレは突きかしら？でも二刀流と云うことは……ここからでも他の技に繋がれそうね……。なら流すより弾くべきね……。）

「はっ！！」

カキン！！

桜は自身が持つ木刀を横凧ぎに振り攻撃を弾き返した

桜side out

恭也side

「なにっ！！」

「射抜き」を弾き返され、次の派生技に繋ぐ筈が体勢を崩され繋がれなくなってしまった

「…今のは狙って弾いたのか……??流すという方法もあったはずだろう??」

恭也が桜にそう聞くと

「恐らく流した場合、次の技…派生技があるかと思ひまして……。二刀流ですし…ね？」

小悪魔みたいな笑みを浮かべる桜に恭也は素直な感想を言う

「ふっ…。よく分かっている…。ならば此処からは言葉は不要!…参る!」

恭也 side out

会話を終えた恭也は攻撃を開始し始めた

作者からの注意書き

（此処からは恭也sideと桜sideでしばらく続きます。）

（恭也sideで恭也が技を出してもすぐに桜sideには飛びはしません。）

（模擬戦終盤は交互に切り替えますが、途中の戦闘の様子は上手く両sideの話を繋げて貰えればご理解出来ると思います。）

（それでは、続きをどうぞ♪）

恭也side

（初めの「射抜き」は防がれたが…まだ当てようはあるな…。）

（次は徹と貫も使ってみるか…）

「せつ！！はあっ！！」

右手の木刀で頭上からの振り下ろし、左に持つ木刀を右から横へ
風ぐ恭也

ガッ！ブン！

二刀目は一步下がられ避けられる…が

「甘い！「薙旋」！！」

避けられた分だけ距離を詰め技を抜き放つ

ガガッ

ガッッ

ヒュン

カキン

四連続で切り放つ「薙旋」でさえも最後の二撃は当たらない……

「まだだ！「射抜き」！！」

ヒュン

初めに弾き返された為に力を入れた技だが、今回は後方に避けられてしまう

「逃がさん！！」

ヒュッ、ヒュッヒュン

下がった桜を目掛けて飛針を投げはなった恭也

しかしこれも左右に避けられてしまう

（……確かにこれだけ力があれば余裕を持てることが分かるな……
だが本当に強いな……）

攻撃を繰り返しながら素直に強いと感じていた

恭也 side out

桜 side

（恭也さんがまた攻撃を始めたわね。）

（でも…力を使わなくてもまだやれるわ……）

頭上から振り下ろされる恭也の木刀に対し、両手の木刀をクロスさせて受け止める桜

その刹那：左から右に薙払われるもう一振りの木刀を一足跳びで後方に下がり回避するが…

恭也は距離を詰めて技を放つ

「甘い！「薙旋」！！」

桜の目に映る四連続の斬撃は綺麗な太刀筋で桜に襲いかかる

（上下左右からの四連続攻撃……全てを受けきるのは無謀かしら？）

（……今はまだ回避を行いましょうか。）

内心で暫くは回避すると決めた桜

それでも恭也の攻撃は早く、最初の二撃だけは木刀で受けざるを得なかった

（恭也さんの攻撃は速いわね…もう少し速く回避しなきゃ…。）

（だけど、攻撃を防御する度に衝撃が内部に徹るけど…これも技かな???)

（そうなら防御は禁物…大きく回避…「まだだ！」「射抜き」…！」「いけない…！」）

攻撃を止めることの無い恭也は益々攻撃の頻度を上げてくる

（射抜きは後方に大きく回避すればいい…よつと…。この後は…「逃がさん…！」…っ…！」）

後方に下がり距離を開けた筈が、恭也は飛針を投げ放つ

（くっ…これは暗器…??こんな物も使うのね…）

（……そろそろ攻撃に出た方がいいかもしれないわね……）

考えを纏め行動を起こそうとする前に…恭也に向かい言葉を掛けた

「そろそろ私も攻撃しますよ？」

「5分間はあつという間に過ぎてるみたいですし……ふふ」

「ふつ。俺もちょっと退屈だったんだ…此処からは楽しませてくれよ??？」

「ええ！もちろん」

「後、恭也さん？すぐに終わってしまわないでね？」

「終わらせないさ！」

「そうですか。……それなら……」

「Are You Ready？」

恭也がそう聞こえた瞬間…桜は恭也に向かっていった

「アルテミス？この場所に認識阻害と空間隔離の結界をお願いしますね？」

「その後で身体強化を掛けて！」

「イエス。マスター♪術式展開…完了。続いて身体強化をします。」

「ありがとう♪アルテミス」

「いえ！このくらいはなんとも…しかし長引くと厄介なので早めにお願いますよ？」

「そうね…。そうするわ！！」

恭也に向かいつつもデバイスをお願いをする桜

恭也に迫り攻撃を繰り出し始める

「夢幻二刀術・式之太刀…妖幻刀「ようげんとう」」

袈裟切りと横薙ぎの攻撃を仕掛ける桜

ヒュッ、ヒュン

…フッ…

ビシッ、ドゴッ

繰り出した技に防御の構えを取る恭也だが木刀に触れることなく攻撃を受けてしまう

「恭也さん。これでお終いです。」

「夢幻二刀術・参之太刀…夢霞「ゆめがすみ」」

桜が両手の木刀を上段に構え恭也の肩口に振り下ろした

「これで終わるとは思わない方が…ガンッ…う…っ…」

「終わりなんですよ。恭也さん…。」

何故か肩口に振り下ろされた筈の木刀が鳩尾に突き刺さり…突き刺したときの桜は後ろを向いていた……

桜 side out

「そこまで!!」

士郎が声を上げて模擬戦の終了を伝えた

「すみません士郎さん。恭也さん…意識を刈り取ってしまいました…。」

「いや…気にしなくても大丈夫だよ」

「と…とりあえず恭也さんの治療をしますね…。」

「アルテミス? 良いわよね??」

「大丈夫でしょう。恐らくですが…。」

「じゃあ回復しましょうか?」

「アルテミス。お願い」

「Twilight care」

道場の中に夕焼けの優しそうな光が発生すると、恭也の体を包み始めた

やがて程なくすると恭也は目を覚まし負けてしまったと家族に苦笑しながら話した

なのはside

（お兄ちゃんと桜ちゃんが戦ってて、桜ちゃんが最後の技を出したとき凄く格好良かったの／＼）

（私も桜ちゃんみたく成りたいと思っちゃうの／＼）

「と…とりあえず恭也さんを治療しますね？？」

（治療？あつ！魔法を使って治療するんだね！近くに行つて見るのゝ）

「Twilight care」

（わぁ…夕焼けみたいな光なのゝ凄く綺麗なの…。）

（でもなんだろう？身体が熱くてなんかじつとしてられないの……）

「ううう…にやゝ!!!!」

桜の魔力がなのはのリンカーコアの躍動を始めてしまう切欠を作ってしまった

「これで恭也さんは大丈夫です…後は今日は安静にして下さいね？」

「それと「にゃ〜！！！」…っ！なのはちゃん！！」

「アルテミス！」

「大変ですマスター！！なのはちゃんのリンカーコアが躍動します！！」

「とりあえずこのままじゃマズいわ！皆さんに説明をして抑え込みましょう！！」

「はい！！」

「皆さん！なのはちゃんも魔法使いの素質が在ったようです！」

「今のなのはちゃんの状態は、内面にある力に躍動されていて、なのはちゃん本人では抑え切れない状態です！！」

「なので今から落ち着かせるのですが…私がやるとどうしても魔法と云う力を持つてしまいます…」

「それでも…構いませんか??」

「「「もちろん（よ）（だよ）！！！！！！」」「」」

「分かりました…。いきます!!」

そう叫ぶと、なのはの下には魔法陣が浮かび上がり桜は詠唱を始めた

「黄昏の光を纏いて、汝の力を成す……黄昏はやがて闇に変わるように、汝の力も内なる力と成れ……」

恭也と同じようになのはの身体も黄昏に包まれると、落ち着いた様子で桜の方を見ている

「桜…ちゃん…？私は…??」

「ごめんなさい……なのはちゃん……なのはちゃんは魔法使いに成ってしまったの……」

「桜…ちゃんと…同じ様な…??」

「ええ……なのはちゃん…ごめんなさい……」

「うっん…！私は嬉しいよ??桜ちゃんと一緒に魔法使いになれて！」

「それに…魔法を練習すれば桜ちゃんを守ってあげられるの。」

「……なのはちゃん……」

「だから、そんな悲しそうな顔しないで！？笑ってなの♪」

「……………ありがとうね……………。…なのはちゃん……………」

「よし！今日は桜ちゃんが家に來たし、なのはも魔法使いに成ったし、今日はご馳走にしよう？！」

「なあ？桃子！！」

「ええ♪桜ちゃんの歓迎パーティーとなのはが魔法使いに成ったお祝いに♪」

「じゃありビングに戻っておいしいご飯をみんなで食べるぞ！！」

「……………おお……………」

「お……………おお……………」

「ほらほら桜ちゃん♪さっきも言ったけど今日からは家族よ♪遠慮しなくていいのよ！」

「ほらみんな！さつさと移動してパーティーを開くぞ！！」

なのはが魔法使いになったり、模擬戦で桜が勝ったり、高町家の一員になったりと、たくさんの出来事が起きた今日の事を桜は大事にしようと心に決めた

そして彼女はこの暖かい家族に……………少しずつ……………一つずつ自分の過去を

話そうと決めたのだった

第4話（後書き）

如何でしたでしょうか？

なのは魔法使いになったり、恭也に勝ったりと納得できるような話しになっていれば幸いです。

次回は高町家で開くパーティーです。
歓迎会ですね。笑

次回はあまり触れなかった高町家sideの大まかなキャラ設定を本編に描きたいと思います。

では、また次回お会いしましょう！

第5話（前書き）

表現力が不足しているかも知れない第5話ですが……皆様、不甲斐ない私をお許し下さい……汗汗

第5話

恭也との模擬戦が終わり、桜の歓迎会としてパーティーが開かれようとしていた

高町家は皆、笑顔で準備を進めている

そんななか…桃子からこんな事を話しかけてきた

「ごめんなさいね？桜ちゃん！まだ準備に時間が掛かりそうなのよ…。」

「だから、なのはの部屋でお話ししてきたらどうかしら？？」

「きっとなのはも嬉しいはずよ」

桜はなのはに伝えておきたいこともある為、桃子からの申し出を快く承諾した

「そうですね……。私も幾つかなのはちゃんに話しておきたい事もありますし……。」

「……桃子さん……。今日の夜、なのはちゃんを除いた皆さんを集めてもらえませんか……？」

「それはいいけれど……、何故かしら??」

「理由は後ほど説明します……。私となのはちゃんに関わってくる話なんです…。」

「……分かったわ！それじゃあ、パーティーが終わったらみんなを集めておくわね！」

「お願いします…。」

桜は静かにお願いすると桃子はなのはに声を掛けた

「なのは…。」

「なあに？お母さん！-！」

「桜ちゃんと一緒にお部屋でお話ししてらっしゃい！」

「後は恭也と美由紀に手伝ってもらうから！」

「分かったの…じゃあ、桜ちゃん！なのはのお部屋にご招待するの…。」

「なのはの事をお願いね？桜ちゃん…。」

「はい！じゃあなのはちゃん？案内してくれる？？」

「うん…行こ行こ…。」

なのはに背中を押されながらリビングを後にする桜となのは

そんな様子を微笑ましく桃子が見送ると、士郎と恭也と美由紀に向かって先程の話を告げ、パーティーの準備を進めるのであった。

桜 side

なのはを予期せぬ事で魔法使いにしまった桜は、これから起り得るであろう事を高町家に知っていてもらおう考えていた

（それにはまず、私自身がなのはちゃんに説明と確認をしないと…）

「桜ちゃん♪お部屋に付いたの!!」

「それでは、桜ちゃん♪なのはのお部屋にご招待なの♪」

気付けばいつの間にかなのはの部屋にたどり着いていた桜

なのはわベッドに座り、桜は椅子に座った直後……桜は魔力遮断と防音結界を張ってなのはに説明を始めた

「なのはちゃん、まず幾つか確認しておきたい事と話しておきたい事があるの……。」

「それが終わってから話をしましょう??」

「う…うん…。何かな？桜ちゃん？？」

「まずは確認ね？…なのはちゃん、心を澄まして、自分の中にある力が分かるかしら？？」

「えっと…、やってみるの…！」

そう桜に告げると、瞳を閉じて集中し始めた

（まず、なのはちゃんの魔力がどの位になってしまったか確認しないと…）

（恐らく私が考えている通りであれば…）

「さ…桜ちゃん…！これは何？？…！」

「なのはちゃん、分かったかしら？」

「うん…。何かすごい違和感があるの…！」

「じゃあ、次はその力を外に出してみて？？今はそれがどの位か分からないと話が出来ないから。」

「わ…分かったの…。えっと…こう…かな…？？」

必死に試行錯誤をしているのは

そんな時……なのはから桜色の魔力が吹き出し、桜の表情を一変させた

(「う…うねはー!」)

「うん……多分こんな感じかなあ？……って桜ちゃん？どうしたの？？」

(……なのはちゃん……やつぱりこの魔力資質と魔力ランクは……)

「なのはちゃん……恐らく今は分からないかも知れないけど、私の力を少し持っていてしまっているわ……。」

「それが原因で、なのはちゃんのはあり得ないくらい強くなります
ぎているの……」

(……最悪の場合……皆さんに説明した上で、封印しなければ……)

「なのはちゃんは……自分の力をどう使いたい？」

なのはに突然投げつけた質問

それは桜にとって、自身が決断するための選択肢だった

桜
side out

なのはside

部屋にたどり着いたなのはと桜

お互いが座り始めた途端、桜が話し掛けてきた

「まずは質問と確認しておきたいことがあるの。それが終わってからお話ししましょう??」

（質問と確認……??なんだろう??）

「まずは心を澄まして、自分の中にある力が分かるかしら??」

桜はなのはに質問を始めた

「えっと……やってみるの……。」

（心を澄まして……ってどうやればいいんだろう??）

（と……とにかく……集中してみよう……!）

なのはが瞳を閉じて集中し始めた……

（えっと……っ！！これは何！？？なのはの中に何かすごい違和感があるの！！）

その事を驚きながら桜に告げると

「桜ちゃん！！これは何！？？」

「なのはちゃん、分かったかしら？」

「うん…。何かすごい違和感があるの……。」

「じゃあ、次はその力を外に出してみて？？今はそれがどの位か分からないと話が出来ないから。」

桜は次の質問をなのはに話すと

「わ…分かったの…。えっと……こう…かな…??」

なのはわまた行動を開始した

（私の力……外に出すって難しいよお……。）

必死に試行錯誤をしているのは

（外に、外に、…私の力よ…外に出てきて!!）

そんな時……なのはから桜色の魔力が吹き出し、桜の表情を一変させた

（わあ…桜色だあ！綺麗…）

「うーん……多分こんな感じかなあ？……って桜ちゃん？どうしたの？？」

なのはは驚いている様子を見て桜に問いかける

「なのはちゃん……恐らく今は分からないかも知れないけど、私の力を少し持ってしまったているわ…。」

「それが原因で、なのはちゃんはある程度強くなりすぎているの…。」

「……なのはちゃんは自分の力をどう使いたい……？？」

桜はなのはに力の使い道を問い始める

それは決死の覚悟を決めたようであり、また悲しげな表情であった

……

（桜ちゃんの瞳……すごく悲しい……。）

（そんな瞳をする桜ちゃんを私は…助けたい!!）

（……そっか……私は自分の力を……）

「私は桜ちゃんを助けるために使いたい!!」

「そんなに悲しい瞳をする桜ちゃんを助けるために!!」

（桜ちゃんの為に使いたいんだ!!）

なのはsideout

桜side

桜はなのはの返答次第ではとある方法で魔力に封印を施そうとしていた

……しかし、なのはの返答は……耳を疑うような答えが返ってきた
……

「な…なのはちゃん??今、なんて……!!」

「桜ちゃん、私……桜ちゃんを助けたいの!!」

「桜ちゃんの瞳は悲しくて……私の力は桜ちゃんを助けるためにあると思ったの!」

「私はそのために……桜ちゃんと出逢ったんだと思う……。」

「でも!!私は……!!」

「桜ちゃんの瞳は暗くて悲しい。きっと酷いことや悲しい事を見てきたんだよね??」

「だから、次からは私も一緒に桜ちゃんの為に戦いたいの!!」

「独りで抱えてしまうような思いも、悲しい出来事も……桜ちゃんと二人で背負って行きたいの!!」

(……なのはちゃん……こんなにも強い……)

(私には持ち合わせていない別の力……)

そんなとき、デバイスのアルテミスから念話が届く

桜はマルチタスクを使いアルテミスと会話を始めた

「桜……あなたの負けですね……。」

「アルテミス……。」

「しかし……なのはさんの力は予想外でしたね！」

「いくら桜の力を持ってしまったとしてもここまでとは……。」

「そうね……。ざっと見て……、アルテミスどの位かしら?？」

「恐らく今で魔力ランクSはあるかと……。」

「……明日には魔力コントロールを教えないとね。」

「ですね!-!」

そんなやり取りをアルテミスとしながらも、なのはに話しかけている桜

「ありがとう……//なのはちゃん……//」

今まで桜には友人などいるはずも無く、過ぎた力を持つ少女は追われる日々を過ごしていたが……

なのはに出会った桜と、桜に出会ったなのは

二人の運命の輪は静かに回り始めた

桜 side out

桜が聞きたい事も終えて結界を外し、なのはと仲良く話していた時…

コンコン

なのはの部屋にノックの音と桃子の声が聞こえてきた

「なのは♪桜ちゃん♪準備が出来たわ！リビングにいらっしやい♪」

「はあ〜い♪桜ちゃん行こう?!」

「ええ!そうね♪行きましようか。なのはちゃん!??」

二人がリビングに入ると士郎と桃子、恭也と美由紀がクラッカーを鳴らした

ポンッ

ポポンッ

「」「」「高町家によっこそ♪桜ちゃんくっ」「」「」

「さあさあ♪主役の桜ちゃんも来たことだし、パーティーを始めましょう!」

「『『賛成!!』』」

パーティーが始まると高町家の自己紹介があつた

「改めて自己紹介をしようか。私は高町士郎だ!『喫茶翠屋』を経営しているよ。」

「私は高町桃子よ♪私も翠屋でパティシエをやってるわ♪」

「次は俺か……。高町恭也だ。剣術をしながら大学に行っている。」

「次は私だね!!私は高町美由紀。恭ちゃんと一緒に剣術を習いながら翠屋も手伝っているよ。」

「最後はなのはだね!高町なのは。7歳だよ!今は桜ちゃんと同じ魔法使いです♪にはは／＼／」

「後、なのはは私立聖祥大付属小学校に通ってるの♪」

パーティーが始まり高町家の自己紹介が終わった後、桜も自己紹介を始めた

「皆さんが自己紹介をして下さったのに、私がしないわけにはいかないですね……。」

「改めて…私は十六夜桜。なのはちゃんと同じ7歳で、とある世界から来ました。」

「そして、こっちが私の唯一の友達…アルテミスです。」

「簡単な自己紹介ですが、皆さんよろしく願いします!!」

今まで体験したことのない楽しいパーティー

そんな時間を過ごした桜だが…この後、なのはを除いた高町家全員に伝えなければいけない事があると思うと、怒りがこみ上げてくるのであった……

第5話（後書き）

どう…でしたか…？

皆様方に納得できる内容だったでしょうか？

改善案や評価など、感想等も頂ければ随時改善していきたいと思
います。

では、次回にてお会いしましょう。

第6話（前書き）

今回は短めです。

終わりはちょっと納得行かないかもしれませんが……ご容赦下さい。

第6話

高町家でのパーティーが終わりを告げ、疲れ果てたなのはが眠り始めるのを確認した桜は、高町家全員が揃って待っているリビングに赴いた

そこには…桜の話を聞くために真剣な顔をした士郎達が待っていた……

「桜ちゃん。話しというのは??」

士郎が桜に聞く

「まずは遅くに集まっていたくださありがとうございます!」

「これから話すのは、なのはちゃんに関する事です……。」

桜はそう告げると、これからの事を話し始めた

「まずは、私が話しを終えるまで質問は無しにして下さい。」

「……分かった。まずは話を聞こう……。」

士郎がそう言うと桜は一つずつ話しを始めた……。

「では……。まず一つ目に、なのはちゃんには私のようにデバイス……アルテミスのようなサポート機器がありません。」

「予期せぬ事で魔法使いにしまいました。が、今のままではなのはちゃんは……自分の力に振り回されてしまいます……。」

「もちろん、長い時間を掛ければ制御することも可能ですが……私……私が力の暴走を抑えるために使った力の一部を受け継いでしまいました。」

「本来ならば、自分で力に目覚め、制御できるはずがイレギュラーな私の力のせいで制御出来なくなっています。」

「今は私とアルテミスが暴走しないようにしていますが……近いうちにまた暴走をしてしまうでしょう。」

「そのために……なのはちゃんには力をコントロールするための訓練をしなければなりません。」

「しかし、この世界では魔力という概念が無い……この世界で訓練はできません。」

「もし、この世界で訓練を始めた場合は……追われている人達……組織に見つかる可能性もあります。」

「ましてや、私の力を受け継いでしまった為に……その組織からしたらなのはちゃんは何としても引き込みたいと思うはずです。」

「私は、そんな事をさせたくありません!!……なので、とても言いにくいことですが……なのはちゃんを違う世界で訓練させたいのです……。」

「その世界ならば組織の手は届かず、いつでも帰ってくる事が可能になります。」

「……ただこのような話しは到底信じられるような話しでないのは分かっています。」

「それでも!!私を信じてなのはちゃんを預けてくれませんか!!??」

「これ以上、あんな事を繰り返しては……」「もう良いわ。桜ちゃん??」「……っ!!」

突然、桜の話しを断ち切った桃子

続いて出てきた言葉は、桜に取って以外とも思える一言だった……

「桜ちゃん?貴女の瞳はすごく悲しい瞳をしているわ。」

「貴女がどれだけ大変だったのか。それは、貴女のその瞳を見れば大体分かるわ。」

「そして、なのはを心配してくれていることも……ね!」

「……私は、本来ならばそんな事をさせるつもりなど無いのだけれど……、私は桜ちゃんも娘として大事に思っているわ。」

「その娘が、なのはについてどうすればいいのか私達に教えてくれているのだもの……私は桜ちゃんを信じるわ!!」

桃子が言った言葉……それは、なのはを連れて行っても構わないと言ったことだった

「ですが、桃子さん!! 私は貴方達からなのはちゃんを取り上げてしまふのと同じ事を言ってるんですよ??」

「私自身、このような手段しか出来ない事に怒りを覚えているのに……。」

「桜ちゃん……貴女はとても優しい子なのね。それも自分では気付かないくらいに!!」

「でも大丈夫よ? 私には長く出かけても帰ってくる娘が二人もいるんですもの!!」

「それに士郎さんや恭也、美由紀もね。」

「なのはを連れて行かなきゃいけないのは悲しいけれど、桜ちゃんが言った言葉を信じて待ち続けるわ!!」

桃子の言葉を聞いた桜は、俯いて涙を零した。

それもつかの間、士郎の一言に驚き慌てて顔を上げる

「話しは分かったよ。俺も反対はしない。もちろん恭也や美由紀も
しないだろう。…だから話しは聞いたね？桜ちゃん行っておいで
…なのは…！」

振り向くとそこには嬉しそうに笑っているのがいた

「な、なのはちゃん…！いつのまに…！？？」

「初めからいたよ？そして心配してくれていることも嬉しかった！」

「なのはちゃん…。」

「お父さんもお母さんも許してくれた。お兄ちゃんやお姉ちゃんも
分かってくれてる…！」

頷く高町家のみんな

「何よりも桜ちゃんと一緒にいられる…！」

「だから行こう？？桜ちゃん…！そして私を強くして…！」

「なのはちゃん…。分かったわ…！私が教えられることは全部教え

るからね!!」

「早く私と一緒に戦えるようになってね?!!なのはちゃん」

「もちろんだよ」桜ちゃん!!」

「明日からまずは二週間、なのはちゃんの適性を見るからね?」

「移動できるなら今から移動しても良いんだけど…明日の朝にするわ。」

「用意だけはしておいてね?」

「それでは皆さん、話を聞いて下さってありがとうございます!!」

「明日の朝には、私となのはちゃんは違う世界に移動します!」

「お父さんお母さん、お兄ちゃんお姉ちゃん……なのはは強くなるまで帰りません!!」

「桜ちゃんを助けることが出来るようになるまでは甘えたくないのです!!」

「……なのは、行ってこい!!」

「自分の手で桜ちゃんを守れるようになるまで頑張ってこい!!」

士郎はなのはの心境を理解しそれでも構わないと言っている

「桜ちゃん…しばらく会えなくなる。その選別として…俺達、御神真刀流小太刀二刀術の技を見ていくといい。」

「桜ちゃんなら覚えることが出来るはずだ!!」

「ありがとうございます。では…アルテミス？」

「All Right My Master」

「Mode Learning」

「では士郎さん、恭也さん。お願いします!!」

二人が持てる技を出し切って桜に見せ終えたのは……それから二時間過ぎた頃だった

第6話（後書き）

なのはと桜の旅立ちフラグを立てた回でした。

次回からは色々な世界を回りなのはを強くして行こうと思います

では、また次回お会いしましょう。

第7話（前書き）

旅立ったの良いんですけど…訓練じゃなくなってしまいました…。
汗汗

そしてまさかの時系列を無視！

ともかく、本編をどうぞ。

（納得はしてくれなさそうですが）

第7話

旅立つ事が決まった翌日、なのはと桜は高町家の道場で今後の予定を話していた

「なのはちゃん。今日で一度この世界から旅立つけど、準備はできた？」

「持つて行く物もそんなに無いし、これくらいで平気だよ」

なのはが用意した物は、リュックに詰めた普段着だけだった

「じゃあそろそろ移動しましょうか」

「でもどこへ行くの？」

「まずは私達がいてもおかしくない場所…その世界の名前は「ミッドチルダ」って言う場所なんだけど…」

「？なにがあるの」

「そこは魔力のランクが高ければ高いほど、いろんな組織や部隊から引き抜きされやすいの」

「特になのはちゃんのランクなら余計に…ね」

「じゃあ、どうするの？」

「とりあえずこれを着けてくれるかな」

桜が差し出した物… ネックレスを着けるようにと話す桜

「ネックレス？」

「そう、これは私がリミッターとして掛けてる物なの」

「これを着ければ魔力ランクが下がるから目立たないと思う」

「でも桜ちゃんが外したら桜ちゃんのランクは…」

「私は大丈夫よ。この世界に来る前から魔力を限定封印してあるの」

「それでもランクはA Aなんだけど… もう少しリミッターを掛けるから、B + 位まで下がるわ。」

「えっと… A AとかB + ってどの位なの？」

「一番高いランクはSSS。その下にSS+、SSって下がっているの。」

「なのはちゃんは今の所Sランク。リミッターを着ければAランクまで下がるわ。」

「わ… 私ってそんなに高かったんだ……。」

「まあ、これは大まかな目安だから、戦闘技能とか含めれば総合ラ
ンクは上下するのよ。」

「ほえ…とりあえずネックレスは着けたし、移動しよう？」

「そうね…。じゃあ、そろそろ移動しましょうか。」

「アルテミス？サポートよろしくね。」

「all right my master」

デバイスに話しかけた桜は魔法陣を出し次元転移魔法を詠唱し始めた

「数多の世界に流るる多数の光…導かれるは一本の光色」

「光交わる次元世界…誘え、黄昏の扉」

「Gate of the Twilight」

オレンジとも黄金色とも言えない光に包まれた桜となのは

道場を埋め尽くす光が収まった時、そこは静寂な場所となっていた

無事次元転移を果たしたなのはと桜はミッドチルダへと来ていた

なのはは興味津々で辺りを見ていたが、桜に呼ばれ意識を桜に向けた

「なのはちゃん、まずは魔法使い…魔導師として適性を見るよ」

即座に張る魔力遮断と防音結界

「まずはこれを…。」

差し出したのは桜のデバイスであるアルテミス

「桜ちゃん、この後はどうするの?」

「アルテミスを持って魔力を集中してみて」

「うん。…集中集中」

なのはが集中し始めると、魔力が色々な形を取り始めた

「そのまま、アルテミスに魔力を流して」

「わ…わかった…。」

アルテミスに魔力を流すと、先ほど形作った魔力に変化が起きる

「…無数に分かれるのは誘導か直射弾、一本の魔力攻撃は砲撃ね…。」

「魔力が一点に集まってるのは…収束技能があつて、最後は…無数に分かれた魔力から誘導と砲撃…。」

（これは本格的に見つかるとマズいわ…）

「はあ…はあ…桜ちゃん…？次は…。」

「次の適性を見る前に場所を変えるわ。」

「こつちに来て」

「待ってよ」

そう言つて結界を外し森の中に入っていく桜…を追いかけるなのはなのはの目に映るのはオアシスと錯覚するような場所だった

「キレイ…／／／」

「なのはちゃん…なのはちゃんの力は見つかるとマズいくらいな素質があるの」

「だから、私がいる時以外は誰にも見つからないようにして！」

「わ…分かったの…。」

「じゃあ次は…」

ガサツガサツ

「っ！誰っ」

「ゴメン。驚かす訳じゃなかったんだ」

「妹とはぐれてしまつてね…探していたんだけど…見てないかい？」

「私は見てないよ？」

「…見ていないわ。」

「そうかい？いや、済まなかったね…。もう少し探して…」

「お兄ちゃん！」

「ティアナ。探したんだぞ？はぐれたらダメじゃないか。」

「ゴメンナサイ…。」

「見つかったからよかったものの…」

「あの…貴方は…？」

「あつと、自己紹介が遅れたね。僕はティード・ランスター」

「こっちは妹のティアナ・ランスターだよ。ほら挨拶して?」

「初めまして。ティアナ・ランスターです。」

「君たちは…?」

「高町なのはです。」

「……私の名前の前に一つ聞いても良いですか……」

「なんだい?」

「ティードさん…貴方は管理局員ですよ…?」

「そうだけど…」

「…もしですよ?もし、管理局が違法行為に手を染めていたら……貴方はどうしますか?？」

「何をバカな事を……」

「いえ、あくまで「もしも」の場合です。そうだとしたら、どうしますか?」

「…もしもだろう?…そうなら僕は管理局を辞めるかな。」

「それは本当ですか」

「本当さ。極端な話し、そうだとしたら管理局員の全員が犯罪の荷

担をしてるじゃないか」

「そんなの僕はゴメンだよ。」

そう話すティーダの目を見る桜

そして決心したかのようにティーダに話しかける

「ティーダさん…貴方は信用できる人の様ですね」

「…私の名前は、十六夜桜…管理局員なら聞いたことくらいはあるかと思いますが…？」

「……まさか、あの「黄昏の姫御子」かい……」

「やっぱり聞いたことはあるみたいですね。そうですね、あの「黄昏の姫御子」です。」

「まさかこんな所で会うなんて…でも何故この世界に？」

「この子の…なのはちゃんの訓練の為…だったんですが」

「なにか問題が？」

「素質と適性を見る限り、この世界での訓練はマズいことになりまして……」

「ならまた移動するのかい？」

「ええ。この世界にいと、なのはちゃんは絶対に使い潰されてしまいます」

「それは避けたいので…」

「そうか…なら仕方な「お兄ちゃん？黄昏の姫御子ってあの噂の？」
…えっ？ああ…」

「あの…桜さん？少しでいいので「黄昏の世界」を見せて下さい！」

「…ごめんなさい。この世界では見せる事は出来ないのよ……。」

「それに私が認めた人…信用できる人じゃないと入ることはできないし」

「…そうですか…」

「ごめんなさいね。だけど、ティアナが私達と一緒に来て修行…訓練をするなら構わないけど。」

「その間に私の信用とか信頼を勝ち取れたら、一度は世界に入れてあげるわ」

「…ホントですか…？私は噂を聞いて桜さんに憧れているのでお誘いは嬉しいですけど」

「私は付いて来たければ歓迎するわ。でも訓練などについてこれるかしらね！クスクス」

「…ティアナ。お前は桜ちゃんについて行きたいんだろう?」

「なら行ってくるの良い。俺も次の任務が長期になる。一人で待つことは無いさ!」

「お兄ちゃん…。」

「とゆうことなんで…ティアナを連れて行ってくれないか?」

「立場とか無しにして、個人的にお願いするよ。」

「いいですが…ティアナはどうするの」

「私達と一緒にくるの」

幼いながらも必死に考えるティアナ

そして桜に向けて声を掛けた……「私は桜さんの強さと」「黄昏の世界」に憧れています。」

「私も桜さんみたいになれるでしょうか……」

「それはティアナ次第だよ。こっちのなのはちゃんと一緒に強くなれるかもしれないし、ここで諦めるなら私達は行くわ。」

そういつて桜は魔法陣を発生させて転移しようとする

「っ！待って下さい。私も行きます」

「…そう。ならお兄さんとお別れよ。少し待っててあげるから言葉を交わしてきなさい。」

魔法陣を発生させたまま待機する桜となのは

一歩ずつ魔法陣に近づきながらティアナが話しかける

「お兄ちゃん、私はここから強くなります……。そしてお兄ちゃんを守るようになったら帰ってきます……」

そして魔法陣の範囲内に入ると振り向き……

「だから、行つてきます！」

その言葉を合図に桜達はミッドチルダから転移していった

第7話（後書き）

まずは…「kunn様」

ご指摘を頂きありがとうございます。

この回から少しは直してみたのですがいかがでしょう……。

少し今回の内容を…

まずはティアナを引き連れて行きましたが、これは後々のフラグになります。

またなのは魔力が形作ってゝとありますが、これは次回分かります。

訓練編にするつもりだったんですが、次回に回させていただきます。

では、次回も皆様に読んでいただける事を期待して。

今回はこの辺で…。

第8話（前書き）

訓練突入……のはずが……

戦う手段を持たせてなかった…

とゆっわけで今回はこんな話です。

第8話

ミッドチルダからティアナを引き連れて転移した桜

ランダム転移で降り立った次の世界は、なんとも不思議な世界だった

「無事に転移できたわね…。それにしてもここは？」

「桜さん、まさか分からないまま転移したんですか？」

「ええ、修行や訓練ならミッドチルダ以外ならどこでもいいからね。」

「…ねえねえ、桜ちゃん。なんか凄い宝石？があるよ。」

「おーやおや…始めてみる顔だねえ？」

「僕はこの街の町長をしているものだ。よろしく頼むよ。」

「ご丁寧にありがとうございます。私は桜、こちらの子達はなのとはティアナです。」

「…よろしく願います。」

「一つ聞いて良いかね？君たちは何をしに来たんだい？」

「大まかに言えば修行ですよ。」

「この世界にはモンスターとかいますか？」

「ああいるよ！普通のモンスターから龍種まで幅広くね！」

「そうですか。じゃあ私達しばらくこの世界で修行したいんですが、勝手に倒してもいいんですか？」

「いんや、ギルドで依頼を受けてからじゃないと…」「ああ、クエスト式なんですね…」「ああ…その通りだよ」

「じゃあ、なのはちゃんとティアナ、ギルドに行って手続きをしないこう。」

「「うん（はい）」」

町長の話しを無視し一人で納得した桜は、なのはとティアナを引き連れてギルドを目指した

後ろで町長が叫んでいたが三人は無視し歩いていつてしまった

「いらっしやい！ギルドにはどんなご用で？」

「私達三人をギルドに登録して欲しいの。どの位で出来るかしら？」

「初めてなら、自分の名前と今後所属するチームの詳細さえ書いてくれたら手続きは終わりさあ！」

「チームは自分で作っても…？」

「構わないさ。大体がそうするからな！」

「そう…なら…」

桜、なのは、ティアナと名前を書いていき…最後にチーム名を書いた桜

その紙をギルドの人に手渡した

「桜ちゃん！チーム名は何にしたの？」

「ん？…秘密よ。後で分かるわ。」

「ええ…教えてよ！」

桜はとぼけながら二人を連れてギルドを出ていった。

街の中を歩いていると、後ろにいたなのはとティアナは興味を惹かれたのか工房の前で立ち止まり覗いていた

「二人してどうしたの？工房に寄るなんて」

「あつ、ごめんなさい桜さん…私は使える武器が無いので……」

「なのはは単なる興味からだけど…言われてみれば私も武器が無い

ね……にやははは／／／」

そつ…桜はデバイスを持っているが二人は持っていない

なのはは魔力を解放し制御出来れば…何でもないのだが、ここにきたのは制御を練習するためなので、魔力は使えない

ティアナに至っては魔力ランクがどの位かも検討がついてない…のにも関わらず訓練をする…それならば武器が欲しくなるだろう

その辺は桜も抜けてたらしく…まずはこの世界の拠点となる場所を探した…

「この辺りが無難かしら？街の大通りは近いし、人気は無いし。今のうちに…つと。」

結界を即座に張る桜

「これで雨や風も防げるわ…一応魔力遮断も加えたけど…」

「二人はどうする？私はちよつと出掛けるけど……」

「なのははここで休んでるよ」

「私も少し休んですから、行ってきてください。」

「そう？なら少し行ってくるわね。一時間位で帰ってくるから。」

「行つてらっしゃーい」「」

そして一瞬ではあつたものの転移魔法陣の展開を確認した桜を見た二人は…

「「出掛けるつてそつちなのか！（ですか！）」「」

と二人してツツコんだ！（笑）

転移した桜は管理外世界23世界を訪れていた

「…やっぱりここはもう直すことはできないのね。」

辺りを見渡せばクレーターの数が…緑豊かな世界のはずが今では焦土となり果てていた

「それでも…この世界からじゃないとあの場所には…」

「ごめんね。アルテミス…貴女にまた無理をさせてしまつわ…」

「気にしなくて良いですよ、桜。私は貴女に言われたら白でも黒と言い続けますから!」

「ありがとう…アルテミス…。」

「しかし…また何故あの世界へ?」

「なのはちゃんとティアナはデバイスが無いからね…ティアナはミッド出身だから魔力はあるはず…」

「なるほど。二人の武器を取りに…ですか。」

「後「ルナ」も連れて行くわ…」

「「ルナ」も?!また狙われますよ!」

「かもしれない…でもアルテミスと「ルナ」の二人が入れば負けないでしょう?」

「…桜…貴女も人が悪いわね…。そう言われたら意地でも負けられないじゃないですか。」

「ごめん。悪戯が過ぎたわね…。さあそろそろ行くよ?」

「了解よ。」

「開け、黄昏の扉…姫御子の名の下に作られし世界に我を導き誘え。」

「

「gate open」

「桜。ゲートが開きました…行きましょう」

「ええ。それじゃ…」

「「JUMP! in Twilight town」」

本日三回目の転移？を果たした桜

その世界は幻想的な風景が広がっていた

簡単に言えば南国にありそうな島…なんだがただの島とは言えない程の風景、幻想的に見せてる原因の極めつけは島を照らしている夕日にあった

島と言うだけあって周りには海があり、水平線に沈みそうで沈まない夕日…その光に照らされて波は穏やかに光り、島は暖かな色に色付けされている

「ただいま…。…帰ってきたよ。」

桜が呟くと、この世界が桜を待っていたかのように優しく風が吹いた
それに伴い波も激しい水しぶきを立てている様は桜を歓迎している
かのようなだった

島に降り立った桜はゆっくり歩きながらこの穏やかな時間を満喫して
いた…が、目的の場所にたどり着くと目の前には満月を象った封印
石があった…

そしてその前で少し寂しさを含むように喋り出した

「…ごめんね、「ルナ」。貴女を休ませたかったんだけど…そうも
いかなくなってしまったの。…また私に力を貸してくれるかしら？」
そう喋り掛けると封印石が光り輝き、まるで桜を肯定するかのよう
であった

「……ありがとう。じゃあ、封印を外すわね…。」

「アルテミス？ラインリンク…するわよ？」

「了解…リンカーコアリンク開始…ラインリンク正常に稼働しまし
た」

「ありがとう。さてと……」

「我が名は十六夜桜…空に浮かぶ満月と密接な関係を持つ者なり」

そう言うと桜の体からは黄昏色の魔力光じゃなく白銀の魔力光が放出されていた

「我が白銀の閃光を持って封印の理を解する」

封印石が徐々にひび割れていく

「理を解した者の問いかけに応え目覚めよ」

ひび割れた場所から光が飛び出し

「我は貴女のマスターとなる者なり」

封印石が砕け散った後に残っていたのは…空に浮かぶ一人の少女がいた

「久しぶりだね。桜、アルテミス？」

「ええ、ごめんね。ホントは休ませたかったんだけど…」

「私は大丈夫。桜がいれば…桜の為なら何でもできるよ！」

「ありがと。早速なんだけど、ルナの力でデバイスを探して欲しいのよ。出来るだけ高性能なやつをね……」

「それはいいけど……またどうして？」

「桜にはアルテミスがあるし、あれになれば入らないんじゃない？」

「今、私の仲間……？で二人いるんだけど一人はSランク、もう一人はまだコアが覚醒してないからDランク位だと思っただけど……デバイスを持ってないのよ。」

「なるほど……それで探して欲しいのね。でも何だったら私の知識貸すからーから作っちゃったら？」

「ここには材料も沢山あるしね。」

「でも時間が……。」

「「クロックマジック」があるじゃん。」

「……あっ！忘れてた……。」

「はい！じゃあ、思いついたらすぐにやらないとね」

「そ……そうね！じゃあお願いね？ルナ？」

「ええ。じゃあ桜、やるよ！」

「「ユニゾン・イン」」

「そして、アルテミス次はトライリンク…行くわよ？」

「了解！…トライリンク開始…トライリンク正常に稼働しました。」

「それじゃ…「クロックマジック」スタート。」

こうして桜はなのはとティアナのデバイスをルナの知識を借りて制作してしまった

時間は長い時間が過ぎたはずなのにも関わらず…クロックマジックのお陰で10分程しか経っていなかった…

「さて、二人のデバイスも出来たことだし…二人のそこへ戻りましょうか。」

「トライリンク中なので別世界の魔法が使用可能ですが…」

「そう言えばそうだったね…じゃあこれで戻りますか。」

「…いつかなのはとティアナもこの世界に連れてこようかしら…」

「「リリルーラ」！」

こうして桜はなのはとティアナの場所に戻っていった

なのはとティアナは桜が転移してからお互いの事を話していた

そして時間がある程度過ぎた頃、地面に魔法陣が展開されたのを見て桜が帰ってきたことを知った

「ただいま～。なのはちゃんとティアナに渡すものがあるからこっちに来てくれる？」

「なにになに？桜ちゃん？」

「なんでしょうか桜さん？」

「二人ともデバイスが無いからね。今後修行も出来ないのはマズいから二人にデバイスをあげようかと思つて。」

「デバイスって…桜ちゃんのアルテミスみたいななの？」

「形は違くなるけど…まあそうね。」

「ええ！いいんですか？！デバイスって高いんじゃないじゃ……」

「あつ、私の自作だから高くないわよ。」

さらつと爆弾発言をする桜

それを聞いてびっくりしてるティアナ

なのはは…意味が分かっていないため首を傾げている

「とりあえず！二人にはデバイスを扱いこなせるようになってもらいます。」

「アルテミスみたいに、考えたり出来るようにしてあるからお互いに、デバイスと二人で頑張ってね？」

「じゃあ、まずはなのはちゃんから。」

「なのはちゃんのはミッドチルダでみた素質と適性をインプットしてあるからすぐに練習可能よ。」

「デバイスの名前はなのはちゃんが付けてあげてね？」

「次はティアナね。ティアナは適性とか見てないんだけど、恐らく銃使いになれるかと思う。考え方が冷静だからね。だから銃技をインプットしたわ。できそうなものから修得してね。」

「名前はなのはちゃんと同じでティアナが付けてあげて。」

デバイスを渡し、少し説明をした桜は疲労が出てきたのを自覚したのか、二人に今日は寝ることを告げた

「さて…今日はここまでにしましょう。」

「今日は少し疲れたから私は寝るわね。二人は起きてても構わないけど、結界からはまだ出てはダメよ？」

「なのははこの子の名前を考えたら寝るよ。」

「今日は私もそうしますね。」

「そう？なら私は悪いけど先に寝るわね…おやすみ。」

「「おやすみなさい。」」

「こうして長い長い一日が終わりを告げたのであった……」

第8話（後書き）

なのはとティアナに桜特製デバイスを持たせました

そして桜にユニゾンデバイスをつけました…が、普段はどこにいるのか？

それは次回に判明します。

今回はなのはとティアナの訓練を二分割で投稿しようかと思っています。

ついでなのはとティアナを魔改造してみたいと思ってます。

まずはなのはの訓練から…

魔改造の目標は真っ直ぐな自由と無限の正義を足して、伝説を掛けた感じにしようかと。

では、読んでくれる人に感謝をこめて。

次回にTake Off

（魔改造…納得してくれる人はいるのだろうか……）

第9話（前書き）

なのは特訓編です。

最後のまとめは自分でもこれでいいのかと思いますが…文章能力が低いためご容赦を

では、本編スタートです。

第9話

長い一日が終わりを告げた翌日…なのはの修行を開始すべく桜はなのはに話しかける

「なのはちゃん、今日から修行を開始するよ。準備はいいかしら…？」

「もちろん。桜ちゃんが教えてくれるんだもん、頑張るよ。」

「そうそう…そのことで話があるんだけど…、今回はなのはちゃんの修行に私は手を出さないから。」

「ええ〜！どうしてえ。」

「今回は二人とも修行しつつ、デバイスと仲良くなって貰わないといけないからよ。」

「一緒に悩んで考えて、そして絆を結んで欲しいの。」

「出来るかなあ……」

「大丈夫よ。なのはちゃんなら出来るから」

「うん……難しいけどやってみる。」

「うん。頑張つて！それじゃそろそろ開始するわよ。」

「分かったの。」

なのはの言葉を聞くと桜は不思議な詩を詠い始めた

「黄昏の光を紡ぎましょう」

「紡ぎ出す光は一つ」

「約束の場所へと還る道標」

「光は独り…故に一筋の煌めき」

「宵闇の狭間で輝き皆を照らす優しき光」

桜の周りに球体の光が出来上がる

「……紡がれた光を纏いて役割を果たし、形と成せ……」

「幻想なる黄昏の空間」

最後の一節を紡いだ瞬間…なのはは桜によって創られた球体の中へ入ってしまった

「…後は、頑張ってね…なのはちゃん。」

そういつて背を向け、ティアナの方へ向かっていった……

なのはside

「……っ！あれ？ここは……」

なのはは先ほどまでいた場所と違う場所で戸惑っていた

「えっと……さっきまで桜ちゃんがいて、今はいなくて……てゆうかここはどこなんだろっ」。

「……桜ちゃんが言った通り、もう修行は始まってるんだよね。」

「……この事は後で桜ちゃんに聞くとして……今は修行をしなきゃね。」

「じゃあ……まずはデバイス……「アイリス」と仲良くならないと……」。

「でもどうやれば？」

なのはが考えてると……デバイスから話し掛けてきた

「マスター。まず、「セットアップ」をして下さい」

「わわっ！「アイリス」が喋った。」

「さあ、マスター。」

「え…えつと、せつとあつぷつてのをすればいいんだよね…」

「アイリス。セットアップ？」

「all right my master」

「次にバリアジャケットを決めて下さい」

「バリアジャケット？」

「マスターを守る防護服の事です。イメージして下さい。」「イメージ…うん……」

（難しい……なにかをモチーフにした方がイメージしやすいかも……）

（何がいいかな……学校の制服……あつ、天使を制服で表現出来ないかな……）

（天使の羽は魔力で作って……）

「じゃあ、これで！」

「決まった？じゃあ、バリアジャケット展開するわよ？」

「うん。バリアジャケット…展開！」

魔力光がなのはを包み、バリアジャケットが展開された

魔力光が収まるとそこには……制服に似た服を纏ったのはがいた
しかし天使を体現するためなのか、服の生地？は薄く色は真っ白だった

「こんな感じかな……？でも薄いかな。防御力は低そうな感じ……」

「大丈夫。そのためのデバイス……私がいるんだから。後々修正してあげるわ」

「さあマスター、次は訓練ですよ？」

「うん。まずは魔力で何ができるか把握しなきゃね。」

「マイスター桜が情報を残してくれました。一度マスターも確認してから、一緒に強くなりましょう」

「そうだね。じゃあアイリス、その情報を見せてくれる？」

「了解しました。記録情報を展開します」

なのはの目の前に空間スクリーンが浮かび上がりデータを開く

「…誘導制御と砲撃、スファイア制御？…からの攻撃に…ええ！地上戦の適性もあるの！？」

「これなら、訓練しがいがありますね。マスター」

「やる人が多いよ…」

「少しずつ練習しましょう。私もマスターのお手伝いしますから」

「そうだね…よしやろう！まずは誘導制御から。」

「では魔力弾を生成します。」

なのはのデバイス…アイリスがそう言うとなのはの上下左右に魔力弾が四つ生成された

「誘導制御って言うんだから、私が意識を集中してコントロールすればいいんだよね。」

「よし！まずは一つずつ動かしてみよう。」

（上の魔力弾を…前へ！）

なのはが意識を注ぐと、上に浮かんでいた魔力弾はなのはの思った通りに動き出した

（戻って…ストップ…。そのまま下の魔力弾も意識して…次は二

つ動かしてみよう)

(…レディ…ゴー!)

(上は下へ、下は上へ…クロスさせて…タイミングよく…左右へ!)

二つの魔力弾を制御していると、どこからか桜が現れた

「なのはちゃん、練習はどう?」

「あれ?桜ちゃん。どうしたの?」

「あることをなのはちゃんに教えに来たんだよ。」

「あること?」

「そう…「念話」と「マルチタスク」をね。」

「「念話」と「マルチタスク」…??」

「念話って言うのは……」

「これが念話だよ?なのはちゃん。」

「っ!頭に直接桜ちゃんの声が聞こえる!」

「そう…この念話を使えるようになると魔導師の間では会わなくても会話が出来るようになるの。」

「今なのはちゃんの頭にこの魔力周波数を刻みつけたから、すぐに会話できるよ。やってみて？」

「えっと、こうかな？」

「そうそう。それだよ。これでなのはちゃんも念話ができるようになったね。」

「じゃあ、念話ができるようになったから…次はマルチタスクね」

「マルチタスクって言うのは、簡単に言えば魔法で思考する部分を増やしたりとか魔法を同時に使ったりするための魔法なのよ。」

「今なのはちゃんは誘導制御の練習してたみたいだけど、頑張っても二つか三つが限界なはず」

「うん…三つ同時に動かしたら一個は制御できなかったよ…」

「でもマルチタスクを使えばそれも解消されるから、マルチタスクは絶対に覚えてね。」

「でもどうやって覚えればいいの？」

「なのはちゃんのデバイスを貸して貰える？」

「良いけど…はい。」

「…著作権権限を行使。マルチタスクについてのコピーを開始…」

「了解しました。マイスター。コピーを開始します…コピー完了。」

「はい、なのはちゃん。デバイスを返すね。」

「マルチタスクについてはデバイスが分かってるから、練習の時に使ってみて。」

「きっと、誘導制御が楽になるわ。それじゃ私はティアナの方を見て来るから。何かあったら念話してね。」

そう言うと桜はフツと消えてしまった

「じゃ…じゃあ、マルチタスクを使ってどんどん練習をするよ。」

「了解しました。マイマスター」

それから練習を重ねたのは

練習と訓練に費やした時間は体感時間で二年が過ぎようとしていた

そのおかげで誘導魔力弾の数は最大で30個制御出来るようになっていた

また、砲撃魔法も多数編み出しロングレンジからクロスレンジの砲

撃を使い分けるまでになった。

魔力スフィアを繰り出し、そこからの攻撃方法は何度もアレンジと修正をした結果「ビット」を作り出した

そんな時…桜から念話が届く…

「なのはちゃん、そろそろこっちに呼び戻すけどいい？」

「桜ちゃん！久しぶりだねえ。」

「フフ…久しぶりか…それでも無いんだけどね…」「えっ？なのはは二年位経ったと思うんだけど…」

「その辺も含めて後で説明するよ。とりあえずこっちに戻すわね。」

「うん。分かったの。」

「それじゃ……解除つと……」

周りが光り輝きなのはは目を瞑った

光が収まりだした頃なのはは目を開けると……そこには桜だけが立っていた。

そしてこの場にティアナが揃いしとき…桜となのは、ティアナの三人はこの世界の中で英雄の道を歩むことになるとは…

まだ誰も知らない話であった

第9話（後書き）

なのは特訓編でした。

なのはの魔法名を11話にだします。

次回について

今回なのはの特訓編をやったので次はティアナを魔改造したいと思います。

銃使いにするため、色んなネタを混ぜてしまいそうですが、自分が決めたキャラ位置を崩さないように頑張りたいと思います。

では、皆様が見てくれたことに感謝を。

そしてこれからも見ていただけるように頑張ります。

それでは、次回にお会いしましょう。

第10話（前書き）

今回はティアナの訓練編です。

忙しくてなかなか更新出来ませんでした。今日は更新ができました。

では、本編へどうぞ。

第10話

桜が作り出した不思議な空間になのはを送った後、桜はティアナの訓練の為に幾つか確認をしていた

「ティアナ、今日から修行を開始するんだけど、ちょっと確認したいことがあるの…。」

「あつ、はい。なんですか？桜さん…。」

「まずは私のデバイスを持って、心静かにしててね。」

「分かりました。」

「じゃあ…はい。」

「では、お借りします。……………」

「どう？アルテミス…。」

「やっぱり、魔力はあるわね」

「そう。ランクはどの位？」

「まだリンカーコアが覚醒してないせいか、D+ってところかしら…」

「まずはそこから……。じゃあ、素質はどう？」

「そうね…恐らくかなりあると思うわ。」

「桜が考えてる事は出来ると思うけど？」

「そう。じゃあ、まずはリンカーコアを覚醒させましょう。」

「そうですね。手伝いますよ。」

「ありがとう。」

「ティアナ、もういいよ。」

「はい。ではお返ししますね。」

「ええ。…じゃあ、まずはティアナのリンカーコアを覚醒させましょうか。」

「その後で、訓練を始めるわ。」

「はい。お願いします。」

「じゃあ、始めるわよ。」

そして桜は詠唱を唱え始めた

「覚醒の理…第一章」

「内に秘めたる眠りし力よ…我が詠唱をもって長き眠りより覚醒せ

よ」

ティアナの足元に魔法陣が浮かび上がる

「汝の眠りし力…外なる力に導かれ、今ここに顕現する」

魔法陣はティアナの体を通り抜け頭上で止まる

「覚醒せし力よ…彼の者の為の形と成せ！」

魔法陣は収束し、ティアナの中へと入っていく

そして最後の一節を唱えた

「覚醒の理、第一章…解」

「……ふう、とりあえずこれでリンカーコアは覚醒したわ。」

「恐らくティアナも魔力が分かるはずだけど…どう？」

「はい、分かります。さつきまでとは違う感じがしますから…」

「それじゃあ、力に慣れるのも含めて訓練を開始しましょう。」

「ティアナも自分で出来る限りの訓練をしてね？相談とかはデバイスとすること。」

「一緒に強くなって、デバイスと絆を結んで欲しいから。」

「はい！頑張ります。」

「それじゃ、必要な情報はデバイスに入ってるから…」

「頑張つて訓練してきてね。」

そう言うとき桜は、ティアナをなのはとは別の空間に送り出すために呪文を唱えた

「刹那に輝く宵闇の月」

「月の光を導く為の空間を成せ」

「彼の光は天つ風に吹かれ汝の力となる…」

「ルナティックゲート」

桜 side

二人を送り出した桜は何もない虚空に向けて話しかける

「ルナ？クロックマジックを使うわ。ユニゾンするよ？」

そう話す桜

次の瞬間には虚空がブレて、ユニゾンデバイスであるルナが姿を見せた

「……魔力は平気としても、今日は転移とか多かったんでしょ？」

「疲労とかあるんじゃないの？」

「平気だよ……。これからはあの二人も大変なんだから、このくらいじゃ泣き言なんて言えないよ。」

「……マスターがそう言うなら止めはしないけど、無理はしないようにね。」

「ええ。じゃあやるわよ？」

「分かったよ。」

「「ユニゾン・イン」」

「アルテミス。リンカーコアをリンク……トライリンク開始」

「トライリンク開始します……無事完了しました。」

「クロックマジック……スタート！」

「対象、目の前にある二つの空間内部」

「ルナ…私にもかけるわよ？」

「マスターも？何かするの？」

「ええ…アルテミスに記憶させた剣術をね……。」

「なるほど…分かりました。対象を追加…マスター桜」

「ありがとう。さあ、私が覚え終わる頃にはあの二人も終わるでしょう。」

こうして桜も自分の修行を始めた

桜side out

ティアナside

ティアナもなのと同じように不思議な空間にいた

辺りは薄暗く…且つ月の光が全てを照らしているような空間

そんな空間がティアナの修行場所だった

「……スゴい……。」

「桜さん、どれだけの力があるんだろう?」

「うっん、今は修行を開始しなきゃね」

「まずは私のデバイス…「マリアージュ」を使いこなせるようにならないと。」

「まずはセットアップだったっけ?お兄ちゃんがそう言っていたよ
うな……?」

するとデバイスからも声が掛けられる

「その通りだよマスター。セットアップで合ってるから、まずは起動して認証を済ませよ?」

「分かったわ。それじゃ…「マリアージュ」セットアップ。」

「SET UP Stand by Ready」

「次はマスターの名前を…」

「マスターは私、ティアナ・ランスター」

「了解…登録しました。続いてバリアジャケットを構成します」

「強度などは私が修正しますのでバリアジャケットのイメージをお願いします」

（動きやすい格好かな…ハーフのズボンで、上は半袖のジャケット…ジャケットの裏と腰にデバイスのホルダーを付けて…）

「これでいいかな…。そしたらどうするの？」

「ではバリアジャケットを構成し展開します。」

「イメージから構成…修正…私の記録領域に保存…ジャケットを展開します」

ティアナの服装が変わり、先程イメージした服装に変化する

「私が考えた物と一緒にね。流石だねマリアージュ？」

「ありがとうございます。」

「じゃあ、修行しましょうか。」

「マイスター桜がある程度情報を入れてくれました。」

「まずはそれを元に練習しましょう。」

「何から何まで桜さんにはお世話になってるわね…申し訳ないけど、いずれは私が助けられるようにならないと…」

「そのための練習です。早速やりましょう。私も同期のデバイスに負けたくないです。」

「なのはさんのデバイスね。」

「私も頑張るから力を貸してね？マリアージュ。」

「all right my master」

「じゃあ、早速桜さんが入れてくれた情報を元に練習を……ってこれがその情報なの？」

ティアナの前に空間スクリーンが浮かび上がっていた

「えっと…誘導制御、弾殻形成、速射と連射、…この魔力形成弾はなんだか分からないけど…最後のコレってホントなのかな…汗」

ティアナの空間スクリーンの一覧には「疑似召喚弾」の文字が……

「ま…まあ、今は出来ることから始めましょう。」

「では、誘導制御をと言いたいところですが…慣れる為に速射と連射から始めましょう？」

「そうね、まずは魔力弾を撃つことから始めましょうか」

「了解。ではまずはワンハンドモードで。」

ティアナの手に銃が持たされる

「まずは、魔力を私に込めて下さい」

「その後でトリガーを引けばとりあえず撃つことだけはできます。」

「そこまで一度やってみましょう。…魔力を込めて…トリガーを引く…」

ドゥッ

「反動は余りないみたい。ただここから改良をしないとただ撃つだけしか出来ないね…」

「やることはまだまだあります。短い時間で習得しないといけないですね。」

「そうね…徐々にペースを上げていくわよ？ちゃんと付いてきてね？マリアージュ。」

「all right my master」

それからのティアナは目覚ましい進化を遂げた

まずワンハンドとツーハンドを使いこなし、速射は両手で銃を二丁抜き、撃つまでの時間を極限まで短くした

連射は秒間五発の魔力弾を放ち、最初の二つは誘導制御も出来るようになっていた

弾殻形成は的が無いため効果を見ることは出来ないが、デバイスの証言では…

「三重も弾殻形成出来れば貫けない物はほとんど無いかと」

と言っていた。

初めは分からなかった魔力形成弾も弾殻形成をしてるうちに思い付いたのか、撃つとなにかしらの形を象り、誘導制御もつけてしまうという技に昇華させた

疑似召喚弾だけは何度考えても出来なかった。

デバイスと会話してて気づいたのか銃身に丸い窪みがあるのだが、ティアナはデザインだと思っているのかあまり気にしないでいる。

そんな会話や練習をしていると桜が現れた

「ティアナ、練習はどう？」

「あつ！桜さん。練習はまあそれなりにがんばっています。」

「それよりもどうしたんですか？」

「うん。今日はあることをティアナに教えに来たんだよ。」

「あること？」

「そう…「念話」と「マルチタスク」をね。」

「「念話」と「マルチタスク」…??」

「念話って言うのは……」

「これが念話だよ？ティアナ。」

「っ！頭に直接桜さんの声が聞こえる！」

「そう…この念話を使えるようになると魔導師の間では会わなくても会話ができるようになるの。」

「今ティアナの頭にこの魔力周波数を刻みつけたから、すぐに会話できるよ。やってみて？」

「えっと、こう…ですか？」

「そうそう。それだよ。これでティアナも念話ができるようになったね。」

「じゃあ、念話ができるようになったから…次はマルチタスクね」

「マルチタスクって言うのは、簡単に言えば魔法で思考する部分を増やしたりとか魔法を同時に使ったりするための魔法なのよ。」

「今ティアナは誘導制御で、いくつまで制御出来る？」

「えっと、頑張れば四つはなんとか出来ますけど途中で制御から離れてしまいます……。」

「四つか。それでもすごい方だよ。」

「だけどマルチタスクを使えば制御もたくさん出来るようになるから、マルチタスクは絶対に覚えてね。」

「しかしどうやって覚えればいいんですか？」

「ティアナ、デバイスを貸して貰える？」

「あっ、はい。」

「…制作者権限を行使。マルチタスクについてのコピーを開始…」

「了解しました。マイスター。コピーを開始します…コピー完了。」

「はい、ティアナ。デバイスを返すね。」

「マルチタスクについてはデバイスが分かってるから、練習の時に使ってみて。」

「誘導制御がすごく楽になるから。それじゃ私は私で修行してるから、何かあったら念話してね。」

そう言うと桜はフツと消えてしまった

そしてマルチタスクを使い始めたティアナは更に進化を遂げた

誘導弾の制御数は20を超え、連射から誘導を付けることも出来るようになってしまった。

また、ティアナはあることを試しにやってみたらこれが成功してしまい、かなり強くなってしまった。

そんなとき桜からの念話が届いた

「ティアナ、結構練習してたみたいだけど強くなったと思う？」

「桜さん！はい、多分ですが…なのはさんに勝てるかもと思えるくらいは修行しました」

「あらら…ティアナがそう言うのならかなり練習したんだね！…うん、それならなのはちゃんと模擬戦してみようか？」

「いいんですか？出来ればやりたいんですけど…」

「いいよ。さっき普通の空間に戻したんだけど…じゃあなのはちゃんをそっちに連れて行くね。私は見学してるわ」

「はい！分かりました。」

「それじゃ、もうちょっと待っててね。練習しててもいいけどたま

には休むんだよ？」

「はい…。」

念話が途切れた後、ティアナは内心で考えていた…

（なのはさんと模擬戦…、私も強くなったと思うけどなのはさんもうかなり強くなってるはずよね…。）

（でも私も最後に出来たあの技もある。速射と連射には自信があるし…互角の勝負ができるはず。）

（模擬戦だけど…負けたくない！）

（……なのはさん……勝負です！！）

こうして、桜は模擬戦を組んでなのはとティアナの上達を見極めようとしていた。

ティアナ side out

桜 side

（さて、なのはちゃんを連れてティアナのどこに行きますか。）

「ねえ？桜ちゃん、ティアナちゃんはどこにいるの？」

「ああ、ティアナも別の空間で修行してるんだよ。で、ティアナがなのはちゃんと模擬戦したいって言ってるね。」

「模擬戦？」

「簡単に言えば修行したからどの位強くなったかお互い戦ってみましょって事。」

「あつ、なるほど！」

「と言うことで、今からティアナがいる空間に行くからね。」

「私は見学してるから、力尽きるまで戦ってもいいよ。」

「そこまではしないよ。」

「ハイハイ。とりあえず行くわよ。」

「もう〜…」

「…ルナティックゲートオープン…転移場所…ティアナ。」

そして桜となのははティアナの場所に行き、模擬戦を開始するのであった

第10話（後書き）

いかがでしょうか？

ラストに模擬戦フラグを立てましたが…どちらを勝たせるかはまだ決めてません。

…どちらがいいですかね？苦笑

これからも読者の皆様方に飽きられないように頑張りたいと思います。

では、次回にまたおあいしましょう。

ドライブ・イグニッション♪

第11話（前書き）

なのはとティアナの模擬戦です。

話しに出てくる技に関しては模擬戦が終わり次第、解説の話しをつくります。

その時に纏めて前の話しに出てきた桜の魔法も解説します。

では本編をどうぞ！

第11話

ティアナside

（今からなのはさんと模擬戦……）

（きっとなのはさんもかなり修行したはず……）

（でも私も修行したし、あの技もある……）

（勝つことは出来なくても引き分けにはできるはず……）

（勝負です！なのはさん。）

桜がなのはを連れてくる間にも、ティアナは闘争心を燃やしていた。
そして…その時がやってくる。

ティアナside out

桜side

「さて、ティアナのいる空間に来たけれど…何処にいるのかな？」

「桜ちゃん、転移目標をティアナちゃんにしたんじゃないの？」

「そのはずなんだけどね…。」

「桜さん、なのはさん。」

「あつ、いたよ。桜ちゃん！」

（…なるほど、考えたねティアナ。）

「じゃあ、早速だけど模擬戦を始めようか。」

「その前に…っと。」

「「リジェネーション」発動！」

リジェネーション

桜が使う体力と魔力回復魔法。

桜ならではの魔法で、体力はその場で全開に。

魔力は桜の魔力を分け与える魔法である。

「これでお互いに回復したはずよ。それじゃ、二人とも用意はいいかしら？」

「私はいつでも構いません。」

「なのは大丈夫だよ。」

「それじゃあ、模擬戦開始!」

桜sideout

ティアナはツーハンドモードにしてなのとは相對する…が、銃自体はホルダーに収まっている

對するなのは周りに二機のビットを繰り出してティアナを睨みつける

「…なのはさん、デバイスは展開しないでいいんですか?」

「…今はまだ様子見だよ。徐々に展開するから安心して。」

「すぐに展開させて見せますよ。…いきます!」

「クイックドロウ、ラピッドファイア」

ティアナはホルダーから一丁の銃を抜いた瞬間、五発の魔力弾を撃った

正にクイックドロウと呼べる速さで。

「速いつ！でもこれ位なら…行つて。」

「デバインシューター、…シュート。」

対するなのはも負けじとビットからデバインシューターを繰り出す

お互いに撃ち出した魔力弾はぶつかり合い相殺される

「次連続でいきます。「リフレクト&トリックショット」」

撃ち出された魔力弾は七つ…しかし全ての魔力弾がなのはに向かわずに撃ち出される

そしてティアナは追加で一発だけ撃ち出した

「どこを狙ってるの？そんなんじゃ私には…「マスター！」えっ…きゃあ。」

なのはの後方から魔力弾が迫り見事になのはに当たった

「ったあ…何が起きたの…？」

「マスター、恐らく最後に撃った魔力弾が命中したでしょう。」

「どうして？誘導弾ならアイリスが分かるはずでしょ？」

「多分ですが…周りに浮いてる魔力弾に種がありそうです。」

「…さっきティアナちゃんがリフレクトって言ってたけど…まさか！」

「恐らくそうでしょうね。周りに反射させて後方から命中させたのだと思います。誘導弾じゃない為、周りの魔力弾に気を取られすぎました。」

「…これは油断できないね…。そろそろ起動しようか。」

「その方が良さそうですね。まずは何で行きますか？」

「…遠距離主体のモードで。最悪マルチモード…行くよ？」

「了解です。」

なのははデバイスと念話を交わし、ここからの戦い方の打ち合わせをした

「まさか反射させるとは思ってたよ。」

「でもここからは私も本気で行くからね？」

「構いませんよ…なのはさん…本気で戦いましょう。」

「なら…アイリス！ロングモードに変更…私に杖を…」

「了解。ロングモードに移行…マスターの杖を形成。」

（なのはさんに杖…これは手強くなりそうね）

「まずは誘導弾で様子見。ディバインシューター…シュート」

撃った誘導弾は十発

不規則な軌道を描きながらティアナに襲いかかる

「これは両手で撃たなきゃダメかな…」「セパレイトクイック」

「後、さっきの放ったトリックショットを戻して…当たれ！」

ティアナは不規則な軌道を描く誘導弾に呼び戻した魔力弾と、新たに撃った魔力弾をぶつけ相殺した

「まだまだ行くよ？」「コメットシューター」シュート」

なのはの頭上には魔力スフィアが十個形成され、魔力スフィアから無数の直射弾が降り注ぐ

原作を知ってる人はフアランクスシフトを思い浮かべて下さい

「なっ！それは捌ききれない……。これは当たったわね……。」

（予め先手を打って正解だったわ……）

ドドドドンッ

「きゃあ〜！！！」

「漸くコメントシューターで攻撃を与えられた……。」

「でもこれで終わる訳ないよね？」

「そうですね。マスター、油断はしないでくださいよ？」

「分かってるよ。アイリス……。一応アイリスも周囲を警戒してね？」

「了解」

桜side

（なのはちゃんは十分強くなったみたいだね…）

（でもティアナも負けてないし、なのはちゃんがティアナの策に気付いてない）

（ティアナは模擬戦が始まる前から仕込んでいたみたいだけど…）

（…でも良く考えたね。）

（あれならなのはちゃんにもダメージを与えられるだろうし、ティアナにはダメージは無いしね。）

（後でティアナには幻術でも教えた方が長所を伸ばせそうね…）

（なのはちゃんには接近戦の戦術を教えればとりあえずは鍛えることはしなくても良さそう。）

（まあ、ここからの展開次第で今後を考えますか…）

桜は二人の模擬戦を見て今後の課題を考えていた

桜 side out

（なのはさんは私にダメージを与えたと思ってるはず…。）

（私は違つところにいることをまだ知られてない。）

（行動を起こすなら今！！）

「マリার্ージュ！連結後「ピンホールショット」連弾。追加で「ドッペルバレット」を解除。誘導と狙撃…行くよ！」

「了解。連結を開始…完了。「ピンホールショット」連弾、及び「ドッペルバレット」解除。」

「なのはさん、まずは私の奥の手の一つ…捌ききれますか！…シュート」

（おかしいな？ティアナちゃんの反応が無い）

「どうしたの、ティアナちゃん。これで終わる訳ないよね？」

「それともホントに終わっちゃ…「マスター！左右と後方から魔力弾です。しかもピンポイント射撃です！」嘘…どうして？！」

「くっ…ディバインシューターで迎撃して…「連続でまだ来ます！」…追加でコメットシューターも発動だよ！」

「掛かった！「ドッペルバレット」シュート。」

「ティアナは後ろにいるのに、どこから攻撃を…「マスター！危ない！」」

ガガガガガガドオン

「キヤア~~~~!!」

なのはの後ろから魔力弾が当たる

気付けば倒れていたはずのティアナは消えており、その場には誰も居なかった

「く~~~~…いったい何が？」

「私も分かりません。気付いたら魔力弾がマスターに当たってました…。」

「…ティアナがいない…。さっきまで倒れていたよね？」

「はい。そして倒れていた方向とは反対から攻撃が来ました。」

「私はその攻撃を迎撃してたら…」

「また後方から攻撃がきました。」

「一体どうなってるの?」

「不思議そうですね?なのはさん。」

「っ!ティアナ。」

「さっきの攻撃はどうやったの!」

「教えられませんか？私の奥の手の一つですからね。」

「ただなのはさんが強いので策を張っていただけです。」

「ただ、なのはさんに勝てるかは分かりませんが、負けない事は出来ると思いますよ？」

「言ったね？ティアナ。」

「私も本気出してたつもりだけど…。」

「ここからは更に全力全開で行くよ！」

「来て下さい！なのはさん。最後の攻防です。」

「それじゃ…アイリス。マルチモードに移行して、決着をつけるよ。」

「了解、マルチモードに移行します。…移行完了。」

「…私もまだ加減が出来ないから、気を付けてね？ティアナ。」

「望むところです！」

「「それじゃ…最後の攻防戦を…」」

「「始めましょう！…」」

第11話（後書き）

はい。大変申し訳ございません…。

今回の模擬戦は二分割でお送りします。

と言うのも、ここから激化させるために魔法や技が多数です。

そしていつかやったみたいなのはとティアナ視点の話にします。

読んで下さっている皆様には誠に申し訳無いですが、ご理解をお願いします。

またよかったですら感想やご指摘等も頂けると有り難いです。

出来るだけ早く更新しますので2、3日お待ち下さい。

では、次回にお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2994m/>

黄昏の魔導師～最強の姫御子～

2011年3月23日17時01分発行